The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	発話の冒頭からその発話について何が予想可能か
Author(s)	伊藤, 翼斗
Citation	日本語・日本文化. 2015, 42, p. 99-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56918
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

発話の冒頭からその発話について何が予測可能か

伊藤　翼斗

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の会話において、発話の冒頭からその発話についてどのようなことが参与者に予測可能であるのかを明らかにすることである。

我々は発話を聞く際に、発話を最初から最後まで聞いてから初めて意味内容を理解するわけではなく、発話が組み立てられていく過程において話者の言葉や身振りなどを分析し、意味内容を理解していく。このことを明確に指摘したのはSacks, Schegloff & Jefferson（1974）である。彼らは、発話が進行していく最中に聞き手がその発話を分析することによって、発話が終わった時、次の話者へのターン移行が円滑になされる（つまり、間や発話の重なりが最小限になる）ことを説得的に示した。この聞き手による分析において重要なことは、発話は組み立ての最中であっても、その後どのように展開していくか、その都度ある程度（あるいはかなりの精度で）予測可能であるということである。

本稿で見ようとしていることは、発話がまさに始まったばかりの段階で、その後どのように展開していくかについて、どの程度のことを我々は知ることができるのかということである。近年、発話の冒頭で用いられる言語要素に関する研究は徐々に増えてきている（Heritage 1984、Heritage & Sorjonen 1994、Heritage 1998、Heritage 2002、串田 2005、Mori 2006、Sidnell 2007、Hayashi 2009、Schegloff 2009、Schegloff & Lerner 2009、平本 2011 など）。これらはいずれも「えっ」や「なんか」等の個別的な言語要素にのみ注目しているものであるが、本稿では特に特定の言語要素に限定することはせず、発話の冒頭部分でその後の展開についてどのようなことがわかるのか、言い換えれば、会話において発話の冒頭はどのような場で

あるのかを予測という観点から全般的に見たい。

本稿の構成について簡単に述べておきたい。第2節では発話の冒頭の重要性、そして発話の冒頭での予測に関する先行研究に簡単に触れる。第3節では、分析方法について示す。本稿の中心となる第4節では、様々な観点から発話の冒頭で予測可能なことについて分析し、続く第5節でその内容についてまとめる。第6節では、予測可能なことに反する事態が生じたときにどのような事が起こりうるかについて見る。最後の第7章では全体のまとめを述べる。

2. 発話の冒頭と予測

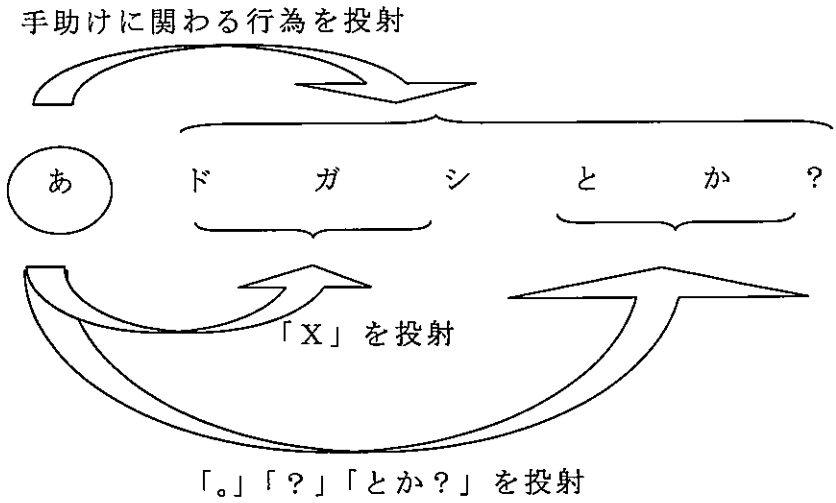
発話の冒頭は会話の進行にとって非常に重要であることはこれまで幾度も指摘されてきた。

例えば、発話の冒頭は前の発話と現在組み立てている発話がどのような関係にあるのかを示すことができる（Sacks, Schegloff & Jefferson 1974、Heritage 2002）。このことは、予測という観点から言うならば、聞き手は発話の冒頭に注目することによって、前の発話とどのような関係のある発話が現在組み立てられているのかに関する予測ができるということである。例えば、ある意見に対しての発話として「でも」が冒頭に配置されれば、「でも」によって開始された発話が何らかの意味において先ほどの意見への反論として組み立てられることが他の参与者には観察可能であろう。

また、発話の冒頭では発話全体の統語的形状や行為について投射がなされうる（Schegloff 1987）。なお、ここでの投射（project）とは、発話における特定の要素がその発話に関して何らかの予告を行なうという性質である。聞き手はその特定の要素が何を投射しているのかを分析することによって、現在組み立てられている発話がどのように展開していくのかを予測できるということである。このSchegloffの指摘について先ほどの「でも」の例から考えてみると、ある意見に対する発話の冒頭に「でも」が配置されることによって、聞き手には「でも」を聞いた段階で、話し手が現在組み立てている発話が反論という行為を構成しそうだということがまずわかるだろう。そして、反論であることから「でも～だよね」や「でも～じゃない？」、あるいは「でも～と思うんだけど」といったいくつかの限られ

た統語的形状になることも予測可能である。このように、発話の冒頭は発話全体の統語的形状や行為について前以て予告する役割を担っているのである。

一つ実際の例を見ておこう。japn6739 のデータ（データについては三節で後述する）には次のような場面がある。一方の参与者が「（アメリカに住んでいても日本茶はどうしても飲みたいから）ジャパンタウンのほら、あのう」と日本茶を売っている店について思い出せずにいると、もう一方の参与者が「あドガシとか？」と、ドガシという店を候補として挙げる。この「あドガシとか？」に注目すると、発話の冒頭の「あ」が何らかの気づきを示しており、続く発話が店を思い出せない相手への手助けに関わる行為であることを投射している。また、続く発話が「X。」「X ？」「X とか？」といった限られた統語的形状になることもわかる。実際、「あドガシとか？」は、相手が思い出せなかった店の候補を提出するという行為、「X とか？」という統語的形状となっている。このことを図にしておくと次のようになるだろう。



図：行為と統語的形状の投射

図中の左から右が時間軸を表している。相手が特定の店を思い出せないという状況において、「あ」が発せられた段階で、続く発話が手助けに関わる行為を投

射する（図中の「あ」の上から出た矢印）。一方、先ほど述べたように、「X.」「X？」「Xとか？」という統語的形状も併せて投射することになる。いずれの場合もまず「X」から始まるため、「あ」は直後に「X」を、その後に「。」「？」「とか？」などの形式を投射することとなる。

なお、投射は通常、ある要素がそれを含む発話に対して何らかの予告をするという文脈で使用される概念である。しかし、後述するように、発話の冒頭からその発話について聞き手が予測可能なことは、単にその発話自体がどうなるかだけに留まらず、その発話の次の発話に関してどのような展開になるかということも挙げられる。このような意味で、本稿では、組み立て中の発話はもちろん、その次の発話に関しても言及していくため、より分析の範囲を広くし、「予測可能なこと」を分析していく。

3. 分析方法

本研究では、TalkBank（http://talkbank.org/）のCallFriendという電話会話コーパスを分析データとして利用している（コーパスについて詳しい情報はMacWhinney（2007）を参照されたい）。このコーパスを利用したのは、①ジェスチャーや視線といった非言語的な側面を含めることによって議論が煩雑になることを避けるため、②読者も音源にアクセスできるため、という二つの理由からである。このデータは、日本語母語話者同士の電話会話で、基本的にはアメリカ在住の日本人がデータ提供者となる。公開されているデータの中から方言や英語の過剰使用により筆者が分析しにくくなっていないもの10例（合計約223分）を選んだ。この音源はTalkBankのホームページでCABank→Media Database→CallFriend→japn/という順番でクリックしていくと入手できる。なお、本研究で分析対象としたデータはjapn1612、1684、1722、1773、4044、4222、4261、4549、6707、6739である。また、本稿で扱っている全て事例に、読者が音源にアクセスするための情報を示しておいた。例えば、すぐ後に使用している（1）について説明すると、（1）の横に［japn4549　02:40-02:44］とあるが、これはjapn4549のデータの2分40秒から2分44秒の間を文字にしたものであるという意味である。

分析に際して、音源の音声およびそれを書き起こしたものをデータとした（な

お、データを使用する際の記号に関しては本論の末尾に一覧として示している）。各人の発話の冒頭に配置されている言語要素（以下、冒頭要素）を予測という観点から分析、整理した。以下では、「発話」、「発話の冒頭」、そして「冒頭要素」について詳しく示しておこう。

本研究で「発話」という語を使用するときは、Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）のTCU（turn-constructional unit）を意味している。TCUとは、発話の順番（ターン）が替わってもよい場所（transition-relevance place）によって区切られる単位で、語、句、節、文という様々な形でありうるものである。この「発話」において、発話の開始地点から意味内容（命題）に関わる語が発せられるまでの区間を本稿では「発話の冒頭」あるいは単に「冒頭」と以下では呼ぶ。また、この「冒頭」で使用される言語要素を「冒頭要素」とする。

具体例を一つ示しておこう。(1) では、Qが学校で受講しているサマープログラムについて述べ、それに対して1行目でPが質問している場面である。

(1) [japn4549　02:40-02:44]
　01P：いつから始まった↑：？
　02　　(0.5)
→03Q：え：：と6月の終わりかな.

ここでは1行目に「いつから始まった↑：？」、3行目に「え：：と6月の終わりかな.」という発話がなされている。3行目について考えたとき、ここでの意味内容は「6月の終わり」であるので、発話の開始から「6月」までの間、つまり「え：：と」がここでは冒頭要素ということになる。なお、1行目は「いつ」が意味内容に密接に関わる語であるため、冒頭要素を配置しない形で発話が組み立てられているものとして本稿では捉えている。

このような冒頭要素から一体どのようなことがその発話について予測可能なのであろうか。以下では、この点について見ていく。

4. 発話の冒頭から予測可能なこと

ここでは実際に発話の冒頭から予測可能であることについて見ていく。しかし、個別の検討に入る前にいくつか注意しておかなければならないことがある。

まず、本節では何が発話の冒頭から予測できるのかという予測可能性について様々な観点から検討するため、各小節はある側面の並列や上位・下位の関係にあるわけではない。いくつかは相互に関係するものもあり、また、そうでないものもある。このように示すのは、発話の冒頭が非常に多種多様な予測を可能にさせる場であることを述べたいためである。

また、次のことにも注意が必要である。以下に述べていくことは、全ての発話の冒頭に当てはまる性質というわけではない。例えば、発話の冒頭で行為の投射がなされるからといって、いつどんなときも発話の冒頭で行為の投射が行なわれるというわけではない。あくまで行為を投射する要素が配置できる場所として発話の冒頭を位置づけているという意味である。

このことに関連して、いま一つ指摘しておくことがある。第4節で述べていくことは、発話の冒頭のみで行なわれるわけではない。先ほどと同じく行為の投射に関して言うならば、行為の投射は発話の冒頭だけでなされるというわけではないということである。

以下、発話の冒頭における予測について検討していく。

4.1. 発話の継続

最初に示しておきたいことは、冒頭要素によって他の要素が後続する可能性を示すことができるということである。つまり、冒頭要素によってまだ発話が続く可能性を投射することになるということである。あるいは、冒頭要素には発話が開始されたということを示す働きがある（伊藤 2013、2014）と言い換えてもよい。当たり前のことと思われるかもしれないが、この性質によって冒頭要素を聞いた受け手は発話を控え、続く発話がどのような行為になるのか、そしてどのように終わるのかに関する分析を開始するよう方向付けられることになるのである。Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）の付加表現（appositionals：訳は西阪 2010 による）もこの性質を利用したものであると言える。付加表現とは、*well* や *but*、

and、*so* などの発話の冒頭に使われるけれどもあまり多くのことを投射しない要素のことである。発話の冒頭は他者の発話との重なりが生じる危険がある場所であるが、仮にそこで発話の重なりが生じて聞き手が付加表現を聞き取れなかったとしても、聞き手による残りの発話の分析には大きな支障が出ない。一方で、発話を開始してターンを取ろうとしていることは相手に示すことができるのである。

簡単に言ってしまえば、発話が冒頭要素で終わりではなく、まだ「続きがある」ということを投射する働きである。この「続き」を強力に投射するものと、相対的に弱く投射するものがある。強力に投射するものの例として、3節で見た事例を再掲する。

(2)［japn4549　02:40-02:44］※（1）の再掲

Qが参加しているサマープログラムについてPが質問している。

01P：いつから始まった↑：？

02　　(0.5)

→03Q：え：：と6月の終わりかな.

この事例では、3行目の「え：：と」が、そこで発話を完了することはせず、発話の組み立ての「続き」を強力に投射している。

一方、「え」に関しては、単独でも発話を構成することができるため、先ほどの「え：：と」等と比べると相対的に発話の組み立ての「続き」を投射する性質は弱いと言える。そのため、しばしば「え」と「続き」の発話は間を挟むことなく接着して発せられる。(3) はその事例である。

(3)［japn1773　03:22-03:25］

Hが隣に住んでいる女性と、その恋人についてコメントしている場面。

01I：[まあ22歳と21歳＞（だ）から＜まあいいかなみたいな.

→02H：え日本人同士[：：？

以上のように、冒頭要素には相対的な強弱はあれど、まだ発話が続くことを投射する働きがある。このことから冒頭要素が配置されたとき、発話の組み立ての続きが直後になされることが予測可能になるのである。

4.2. 行為

既に第2節で触れたように、発話の冒頭では、現在組み立てられている発話全体がどのような行為を構成するのかについて投射されうる（Schegloff 1987）。具体例として（4）を見る。この会話が収録された日の前日、ある有名なロックバンドのボーカルが亡くなった。Pが、そのことを知らないQにその訃報を伝えた後の会話である。

（4）[japn4549　00:18-00:22]
　01Q：原因は：？
→02P：˚.hh˚（.）あの：：（.）心臓麻痺.

ここではQが1行目に「原因は：？」と質問しており、それに対してPが2行目で「心臓麻痺」と応答している。この2行目の発話の冒頭に配置されている「あの：：」という要素について考えたい。この「あの：：」は、話し手が特定の項目を見つけることができていないことを表す「言葉探し」（word search；Schegloff, Jefferson & Sacks 1977）の一種であろう。1行目の質問のすぐ後という連鎖環境で言葉探しを行なうことは、「あの：：」以降の発話が応答という行為を構成することを投射する。さらに正確に言えば、単に応答することだけではなく、特定の死因を含んだ応答をすることを投射している。このことは、特定の死因を含まない応答である「知らない」などが「あの：：」の後には配置されそうにないことからもわかるだろう。

上の例のように、冒頭要素によって発話全体の行為がかなり正確にわかる場合もあるが、次の例のように、投射される行為がいくつかの可能性に限定されることもある。この事例では、会話が録音されていることについて、どの会社に頼まれたのかをAがBに聞き、それに対してBが1行目から答えているところである。

(5) [japn1612　00:21-00:28]

01B：[これ]はね：,学校のね：,

02A：はい：.

03　(0.3)

04B：学校の：：<言語学の：,>

05A：うん.=

06B：=リサーチ.

07　(.)

→08A：あ：リサーチ：.=

Aの質問にBは1行目から6行目までの発話で、学校の言語学のリサーチとして頼まれたということを伝えている。それに対して8行目でAは「あ：リサーチ：.」と情報の受理を行なっている。

ここで注目したいのは8行目である。「あ：」の後に続きうるものとして考えられるのは、「そうなんだ」のような単なる情報の受理、「学校の？」のような確認要求、「先生に頼まれたの？」のような情報要求といったものであろう。つまり、ここで「あ：」は、(5) でなされているような情報の受理だけでなく、確認要求や情報要求も投射していると言える。したがって、この事例は (4) の事例のように、たった一つの行為を投射しているわけではないため相対的に緩やかな投射となっているが、それでもいくつかの限られた行為に可能性を限定しているのは確かであるだろう。

このように、発話の冒頭では発話全体でどのような行為が構成されそうかということについての投射がなされる。その投射によって我々は発話全体の行為を予測することができるのである。

4.3. 統語的形状

これも2節で触れたことであるが、Schegloff (1987) の言うように、発話の統語的形状も発話の冒頭で投射されることがある。このことは発話の冒頭における行為の投射が限定的な場合を考えるとわかりやすいため、先ほど見た (4)

の事例を（6）として再掲し、検討する。

（6）［japn4549　00:18-00:22］ ※（4）の再掲
　01Q：原因は：？
→02P：˚.hh˚（.）あの：：（.）心臓麻痺.

4.2. で見たように、2行目の「あの：：」は特定の死因を含んだ応答がなされることを投射している。そのような予告に合致する言語形式は、「X.」「Xだったかな.」「Xだったと思う.」「Xって言ってた.」といったいくつかの統語的形状に限られるだろう。よって、この発話の冒頭に用いられている「あの::」は、たった一つの統語的形状を投射しないが、いくつかの限られた統語的形状のうちの一つが続くことを投射することになる。

我々はその投射を資源として、現在組み立てられている発話がどのような形状を成すのか予測可能となる。統語的形状は、発話がどのタイミングで終わるのか、つまり、どのタイミングで話者交替ができるのかについて、受け手が分析する上で非常に重要な判断材料となる。この情報は発話が進行していく中でより明確なものとなっていくものと思われるが、発話の冒頭から既にこの情報が利用可能なのである。

4.4. 語の選択

どのような種類の語が現在組み立てられている発話に含まれるかも、発話の冒頭から予測可能なことの一つである。具体例として（7）を見たい。この例では、8行目と10行目に注目する。どちらの冒頭にも「え：」が使用されている。

（7）［japn1722　24:57-25:12］
　01G：↓ウエストバージニア物価高い？
　02　　（0.2）
　03F：.h＞物価＜ね：う：ん高い.
　04G：高いんだ：.＝

05F：＝うん．けっこうね．＝全然安いと思わなかった．＝＞マイアミの
06　　方が＜安いんじゃない？
07G：.hhマイアミすごい安いよ↓な：：．なぜ[か．
→08F：　　[え：でもLAの方が安いよ．
09　　(0.2)
→10G：え：高いじゃ：：ん．
11F：LAはタックスが高いんだよ．

ここではマイアミの物価について、「すごい安い」と思っているGと、そう思っていないFで意見が対立している。

7行目で「マイアミすごい安いよ↓な：：.」と、マイアミの物価についてGが意見を述べており、8行目では「え：でも」とFはそれに反論しようとしていることがわかるだろう。同様に、Gの10行目も「え：」と、直前のFの発話に対して意見の不一致を述べようとしていることがわかる。

さて、マイアミの物価が非常に高いということ、あるいはLAの方が安いということに反論するには、いくつかの特定の語が使われる可能性が高くなることがわかる。その語とは、物価の「高い」「安い」という形容詞である。あるいは比較に関わる語として「より」や「の方が」といった表現や、比較対象としてマイアミと同系列の都市や地域の名前も使われる可能性が高い語と言えるだろう。これらはいずれも8行目や10行目で用いられている語である。事例では使われていないが、その他に「安くない」「すごいという程ではない」などの否定に関わる表現なども使われる可能性が高い語として挙げられるだろう。

このように、発話の冒頭に配置される言語要素が、現在進行中の発話において選択されうる語を前以て予測可能にさせる場合があると言える。

4.5. 連鎖の関係

発話の冒頭には、直前までの発話と現在組み立てている発話がどのような連鎖関係にあるのかを示す働きがある。このことがわかりやすい例として（1）を再掲して見る。

(8)［japn4549　02:40-02:44］※（1）の再掲

Qが参加しているサマープログラムについてPが質問している。

01P：いつから始まった↑：？

02　　(0.5)

→03Q：え：：と6月の終わりかな.

ここでは、1行目の質問に対して、3行目が「え：：と」を冒頭に配置して「6月の終わりかな」と応答している。この「え：：と」も（4）と同様に、応答を投射していると分析できるだろう。このことは、同時に、Pの1行目の発話とQの3行目の発話が［質問-応答］というペア（隣接ペア；Sacks, Schegloff & Jefferson 1974）を構成することを、「え：：と」が発話された時点で予測可能にさせる。

上の例は冒頭要素が［質問-応答］という連鎖関係の中に現在組み立てられている発話が配置されていることを予測可能にさせるものであったが、次の（9）は、冒頭要素によって現在組み立てている発話が「挿入された連鎖（挿入拡張；Schegloff 2007）」を開始していることが示されている。

(9)［japn1773　03:22-03:26］※（3）の続きを補ったもの

Hが隣に住んでいる女性と、その恋人についてコメントしている場面。

01I：［まあ22歳と21歳＞（だ）から＜まあいいかなみたいな.

→02H：え日本人同士：［：？

03I：　　［う：ん.

04　　(0.2)

05H：ふ：：ん.

ここでは1行目でIが意見を述べている。この意見に対して5行目に「ふ::ん」と意見の受け取りを行なっているが、その間に2行目の情報要求と3行目の情報提供が差し挟まれている。このように、2行目は1行目の意見に対する受け取りを一旦ストップして、聞いておくべき質問として挿入されているのである。「え」は前以てあった知識や前提から逸脱した何かに気がついたことを示すもので、そ

のような逸脱を解決するための連鎖を開始する時に用いられる（Hayashi 2009）。つまり、2行目では、1行目の意見にそのままでは受け取れない何らかの逸脱があることを「え」が示し、その解決のための連鎖（2行目の情報要求と3行目の情報提供）を開始しているのである。つまり、2行目全体が、先行する発話が開始した連鎖にとって挿入の関係にある連鎖を開始していることが「え」によって示されているのである。

これまで見てきたことは、冒頭要素が直前の連鎖と関係があることを示しているということであったが、次の（10）は直前までとは関係のない連鎖が開始されることが冒頭要素によって示されるものである。

（10）［japn1612　08:10-08:51］

Cが録音日前日に受けた試験についてBが「どうだった？」（01）と聞いている。

01B：どうだった？＝
02　　((22行分省略。この間Cはいかに難しかったかを伝え、90点
03　　ぐらいあればいいと思っていると言っている。))
04C：うんだ［からそれでいいよ.］
05B：　　［そっかそっか：.］
06　　(.)
07C：.hh うん.
→08C：.hh ＞あ兄ちゃん（ちゃん）に＜¥聞きたいことあるの.¥
09B：あ：何゛き［く.゛
10　　((以下、CがBに車を買い換えるならCの挙げる3種類の車の
11　　うちどれがいいかについて尋ねている。))

ここではBが1行目の「どうだった？」という説明要求をしており、2行目から4行目までCが試験について説明している。Cの説明をBが「そっかそっか:」(05) と受け取った後、Cは「うん」(07) と、更に説明を付け足すことができるにも関わらず、それをパスしている。このことから「これ以上説明することがない」

ことが示されており、7行目の末尾は説明要求と説明という連鎖が終わりうる位置であると言える。そのような状況でCは「.hh ＞あ兄ちゃん（ちゃん）に＜¥聞きたいことあるの．¥」と、「あ」を冒頭に配置して発話しているのである。この発話以降、これまでの説明の連鎖ではなく、質問の連鎖へと移行することになる（なお、8行目は質問の前置きである）。このように、「あ」は直前の連鎖が終わりうる位置で用いることで、直前までの連鎖とは異なる新しい連鎖が開始されうることを示すことができるものと思われる。このことは、「あ」が新しい連鎖を開始していること、つまり、「あ」を含む現在組み立てている発話が新しい連鎖の開始点であることを予測可能にさせると言えるだろう。

以上、現在組み立てている発話が直前までの連鎖とどのような関係にあるのか、冒頭要素によって予測可能になることを見てきた。

4.6.　次話者

これまで見てきたことは、まさに現在組み立てている段階の発話自体に対して予測可能にしていること（発話の続き、行為、統語的形状、語の選択）、あるいは、現在組み立てている発話の連鎖関係に関して予測可能にしていることであった。この小節で見ようとしていることは、これらとはまた別の視点であるターンテイキングに関わることである。

前のターンが聞き取れない、あるいは意味がわからないといったトラブルがあったときに、我々はしばしば修復を行なう（Schegloff, Jefferson & Sacks 1977）。その修復を開始する発話において、発話全体で修復を行なうことを冒頭要素が投射している場合、冒頭要素が配置された段階で、次のターンにトラブル源の話者がターンを取ることが予測可能となる。

具体例を見ておこう。(11) はFの今後の学業生活について二人で話している事例である。直前ではFが「ジェネラル（一般教養科目のことと思われる）取っている間はあたしはここで我慢する」と述べている。この「間は」という部分に反応して、Gが1行目で「それからどっか行くんだ」と、別の大学に行くのかどうか尋ねている場面である。

(11) [japn1722　25:34-26:21]

01G：[>あそれからどっか<行くんだ：.

02　(0.2)

03F：う：んいちおね考えてあるんだけど：,

04G：う：ん.

05F：でもここのジャーナリズムも全然強いのね.

06　((18行省略))

07F：競争率が激しいんだジャーナリズム ..hh

08　(.)

09G：˚うそ：˚.

10F：GPAのポイントが切られてて：,

11G：うん.

12F：何ポイント以上じゃないと入れない˚とかね˚.

13　(0.3)

14G：↓え：.

15　(0.4)

16F：そうそうそう ..hhh[結構難しいの.

17G：　　[ん？

→18G：えっ今もう入ってるんじゃなくて：[え？

→19F：　　[入って[るよ.入ってるけ]ど[:,

20G：　　[意味が分かんない.][うん.

21F：本当のメジャーに入るのに[(.) あたし今 (0.2) プリメジャーだ[から:,

22G：　　[あ！　　[あ：うん

23　うんうん.＝

24F：＝本当の入る時は：GPAが関係すんのね.

25G：うん.

ここで話題になっている大学に所属しているはずのFが、(GPAが)「何ポイント以上じゃないと入れない」(12行目) から「結構難しいの」(16行目) と述

べていることに対して、Gは18行目で「えっ今もう入ってるんじゃなくて:え？」と理解に問題があったことを示している。この理解のトラブルに解決を与えるのはFの19行目から24行目（正確には22行目でGが「あ：」と述べていることから21行目まで）の発話である。

この18行目に注目すると、「えっ」と発した段階で何らかのトラブルが発生した可能性が観察可能となる。この発話の直前までFがジャーナリズムの厳しさについて説明をしていたため、18行目の「えっ」がこのFの説明について修復を開始しているということが、Fにはわかるだろう。よって、18行目で実際に修復が開始された場合、その解決を与える可能性が最も高いのはFであり、19行目でFがターンを取ることが予測可能となる。

二人で会話しているのだから、Gが話した後はFがターンを取るのは当たり前と考えられるかもしれないが、次話者を選択しない形で発話を終えるということは決して珍しいことではない。この「えっ」に関しては、現在組み立てられている発話が完了した後の次話者として相手を選択することを、発話の冒頭の段階で予測可能にしているということが重要なのである。受け手は次話者として話す可能性が高くなり、その結果、「えっ」を含む発話に対して注意を高めること、次のターンでの発話を準備しておくことといった方向付けがなされるのである。

このことは、本研究が二者間の会話を分析対象としているため分かりにくいかもしれないが、三者以上の会話を想定すると理解しやすいかもしれない。発話の冒頭で次話者が誰なのかわかれば、そこで選ばれなかった者は発言を控えるよう方向付けられ、実際にターンが移行する際に発話の重なりが生じる可能性が減るものと思われる。

以上、発話の冒頭によって次話者が誰なのか予測可能であることについて述べた。次節では、一旦これまでのことをまとめておこう。

5. 予測可能なこと同士の関係

第4節では、発話の冒頭から予測可能なことを様々な観点（発話の続き、行為、統語的形状、語の選択、連鎖の関係、次話者）から検討した。その結果、発話を組み立てる上で実に多くの事が発話の冒頭から予測可能なことが明らかになっ

た。もちろん、検討した観点の全てがいつもわかるというわけではない。また多くの観点において、当該の発話がどのような連鎖環境の中にあるのかを考慮に入れなければ予測が成り立たないことも明らかであろう。

ここまでに検討した観点、つまり、発話の冒頭から予測可能なことのいずれもが発話の担う行為と切っても切り離せない。行為の構成には多くの場合いくつもの語を連ねる必要があり、必然的に発話がある程度の長さを必要とする。そのため、発話が続くことが冒頭で投射されなければならない。また、特定の行為には特定の統語的形状が用意されていることも多く、そのことが発話の冒頭での統語的形状の予測が可能な理由となっている。さらに、行為の構成には、統語的形状だけでなく語の選択も密接に関わる。それは、様々な要素（語の選択）が特定の形（統語的形状）で配置されることによって、行為を構成する発話が成り立っているからである。次話者選択に関して言えば、修復を開始するという行為が修復を呼び起こすのであるが、その修復は多くの場合トラブル源の話者によってなされる（Schegloff, Jefferson & Sacks 1977）ことから、次話者を選択することへと繋がっているのである。このように、本稿で扱った様々な観点は行為を軸に見ることで、互いが全く無関係のものではないことがわかる。

発話の続き、行為、統語的形状、語の選択、連鎖の関係、そして次話者に関する予測が可能であることからも、発話の冒頭は会話の進行にとって非常に重要であることは明らかである。このような多種多様な予測が発話の開始時点で可能なことが、円滑な会話の進行にとって重要な役割を担っているのである。

6. 予測と異なる事態が生じた場合

これまで発話の冒頭からその発話について多くのことが予測可能であることを示してきた。最後に、この予測とは異なる事態が生じた場合について言及しておきたい。

一方の話者が、発話の中に組み込んだ要素から予測できること「に反した」内容について話した場合、もう一方の話者が修復を開始することがある。次の（12）ではＩがアパートの隣に住む女性についてＨに話している。1行目の「そいつ」とはその女性のことである。この電話を収録した日、その女性は授業を休んで恋

人といたらしい。なお、その女性は日本人であることがこれまでに明かされているが、男性の方についてはまだ何も述べられていない。

（12）［japn1773　03:08-03:27］※（9）の前を補ったもの

01I ：ま：：えんかなみたいな：そいつもなんかアメリカ人取るか
02　　日本人取るかで：：,
03　　(.)
04H：あ：：[ん.
05I ：　　[悩んでたみたいで：：.
06H：うん：どっち取った：？
07I ：たぶんあの調子だともう完全にもう-n-男取ったみhたhいh.
08　　(0.3)
09H：へ：：：：.
10I ：も：：s-ニサン年ステイみたい感じゃね？＝もう：.
11　　(0.5)
12H：へ：：：：[：：.
→13I ：　　[まあ22歳と21歳>(だ)から<まあいいかなみたいな.
→14H：え日本人同士：[：？
15I ：　　[う：ん.
16　　(0.2)
17H：ふ：：ん.

1行目から5行目で、アパートの隣に住む女性が恋人としてアメリカ人と日本人のどちらを選択するのかで悩んでいたことがIからHに伝えらえている。それに対して、Hは6行目で「どっち取った：？」と、その女性がアメリカ人と日本人のどちらを選んだのか質問している。しかし、7行目でIが答えたのは「男取った」ということである（Iの想定において、何と男を比較して男を選択したと言っているのかデータからははっきりしないが、おそらく、その女性が受講している授業と男を比較したのではないかと思われる）。12行目で「へ：：：：.」と7行

目をニュースとして受け取ったことを示している（Mori 2006）が、その反応は0.3秒もの遅延を伴っている（8行目）。これは即座にはニュースとして受け取れない何かがあることがわかるだろう。直前までの流れを考慮すると、その「受け取れない何か」とは、女性がアメリカ人と日本人のどちらを選んだのかに関する情報がないことであると思われる。このような状況でHがその情報を取得するために取れる手段としては、直接Iにそのことを聞くということもあるが、Iが自発的に話すことを待つということも考えられる。9行目で「へ：：：：.」とだけ反応しているのは、相手の発話の続きを待って、相手が自発的に話す機会を与えているものと考えられるだろう。

7行目から9行目で起きたような、ニュースの提示と遅延の見られるニュースの受け取り、また、そのことによってニュースの拡張を待っているという一連の流れは、10行目から12行目でもくり返されている。つまり、2、3年ステイするというニュースと、遅延のあるニュースの受け取り（「へ：：：：：：」）が再びやり取りされるのである。

注目したいのは13行目である。13行目では「まあ22歳と21歳＞（だ）から＜まあいいかなみたいな.」とIは新たなコメントをしているが、この発話の冒頭で「まあ」が使用されており、続く発話がこれまでのまとめであることが投射されている（西阪・小宮・早野 2013）。実際、続く発話は7行目や10行目と異なり、「いいかな」と述べていることで、カップルに対するIの評価あるいは意見となっている。「まあ」がこれまでのまとめを投射するのであるならば、その女性がアメリカ人と日本人のどちらを選んだのかに関する情報が得られる最後のチャンスとなることが予測可能である。しかし、実際13行目で得られる情報はそのカップルの年齢だけである。つまり、予測可能なことに反する事態が生じているのである。このような状況で、Hは「え日本人同士：：?」と修復を開始している（14行目）。

このように、予測可能なことに反した事態が発生したとき、他の参与者から修復が開始されうる。このことは、ある要素が予測可能にしていることは、データを研究として分析している者にだけではなく、まず参与者によって会話を円滑に進めるための資源として利用されていることを意味している。

7. おわりに

発話の冒頭からはその発話について非常に多くのことが予測可能である。発話の冒頭で用いられる言語要素を分析することで、まず、これから発話が続くということが予測可能であること示した。また、どのような行為になるのか、どのような統語的形状で組み立てられるのか、どのような語が使われうるのか、どのような連鎖の中に現在組み立てている発話はあるのかということも発話の冒頭から予測可能な情報であった。さらに、場合によっては、次話者として誰を選択するのかということも発話の冒頭から予測できる。このような様々な観点での予測可能性が発話の冒頭には組み込まれうるのである。

このような予測は会話の進行にとって非常に重要であろう。例えば、ターンテイキングのことを考えれば、これらの予測がなければ、現在の発話が一旦終わってみなければ参与者に終わったことがわからないというような事態となる。そのような仮定のもとでは、ターンとターンの間でかなりの間が生じるだろう。あるいは前のめりにターンを取ろうとして、発話の重なりがかなり長期なものとなりうる。上に挙げたような予測があることによって、ターンの移行はスムーズに行なわれるのである。

また、このような予測は参与者によって活用されており、予測に沿った発話になっているかチェックされてもいる。実際、第6節で見たことは、予測に反した事態が生じた場合に、他の参与者から修復を開始されうるということである。このことから、各人は相手の発話から予測されることに基づいて発話を理解し、予測可能な形で自身の発話を組み立てていることがわかるだろう。

発話の冒頭が、ここで見てきたような予測にとって重要であることが本稿で示せただろう。様々な観点からの分析であったので雑多な印象を与えるかもしれないが、このような様々な観点はそれほど多くのことが発話の冒頭から予測可能であることも意味しているのである。

本稿では、非常に多くの観点から発話の冒頭について検討したが、各観点についてはそれぞれ別個に掘り下げていく必要があるだろう。個別の言語要素について具体的にどのような連鎖環境で、どこまでのことを予測可能にするのかは本稿では見ることができなかった。また、各観点について、発話の冒頭で予測可能で

あることは示すことができたが、それらの予測がもっとも強力になされる主要な位置（発話の冒頭なのか、末尾なのか等）はどこなのかということも発話の構成を研究していく上で必要になるだろう。さらに、本研究では対象外としていた非言語的な要素についても、発話の冒頭付近で様々な予測の資源として用いられているものと思われる。これらは今後の課題としたい。

［トランスクリプトの記号一覧］

.	：下降調の抑揚。
,	：継続調の抑揚。
?	：上昇調の抑揚。
？	：弱めの上昇調の抑揚。
＜＞	：中の語の速度がゆっくり。
＞＜	：中の語の速度が速い。
↑	：直後の急激なピッチ上昇。
↓	：直後の急激なピッチ下降。
(秒数)	：誰も話していない間の秒数。
(.)	：ごくわずかの間。
° °	：中の語が小声。
＝	：前後が途切れなく続く。
！	：弾むような音調。
¥　¥	：中の語が笑いに近い。
文（h）字	：呼気を含んだ笑い。
[　]	：重複の開始。終わり。
文h字	：呼気を含んだ発話。
文字-	：中断。
文字_	：平板調。
文字：	：引き伸ばし。
h.h	：呼気。吸気。
→	：分析の焦点。

文字　　：強調。
((文字))　：筆者による注釈。
(文字)　　：聞き取りが不鮮明。
(...)　　：聞き取れない箇所。
(A／B)　　：AまたはBと聞こえることを示す。聞き取りが不鮮明な際に使う。

参考文献

伊藤翼斗（2013）「「始まり」のリソースとしての発話冒頭要素」『EX ORIENTE』第20号　大阪大学言語社会学会　67–90

伊藤翼斗（2014）「日本語の発話冒頭における言語要素の研究　―相互行為から見る冒頭要素の順序―」博士論文　大阪大学

串田秀也（2005）「「いや」のコミュニケーション学　―会話分析の立場から」『月刊言語』34（11）　大修館書店　44–51

西阪仰・小宮友根・早野薫（2013）「山形119番通報に関する会話分析の視点からの所見その2　通信員による問題の分析」西阪仰氏のHP　山形大生死亡事件119番通報に関する会話分析の視点からの所見
http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/119_rep.html よりダウンロード（2014年9月26日アクセス）

平本毅（2011）「発話ターン開始部に置かれる「なんか」の話者性の「弱さ」について」『社会言語科学』14(1)　社会言語科学会　198–209

Hayashi, M. 2009. Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 41(10), 2100–2129.

Heritage, J. C. 1984. A Change-of-State Token and Aspects of Its Sequential Placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press, 299–345.

Heritage, J. 1998. *Oh*-prefaced to inquiry. *Language in society*. 27. 291–334.

Heritage, J. 2002. *Oh*-prefaced responses to assessment: a method of modifying agreement/disagreement. In Ford, C. E., Fox, B. A., Thompson, S. A. (eds), *The Language of Turn and Sequence*. New York: Oxford University Press. 196–224.

Heritage, J. and Marja-Leena Sorjonen, 1994. Constituting and maintaining activities across sequences: *And*-prefacing as a feature of question design. *Language in Society*, 1994, 23: 1–29.

MacWhinney, B. 2007. The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds),

Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol. 1. Houndmills: PalgraveMacmillan

Mori, J., 2006. The workings of the Japanese token *hee* in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody. *Journal of Pragmatics* 38; 1175–1205.

Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): pp. 696–735.（西阪仰［訳］（2010）「会話のための順番交替の組織一最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』世界思想社　5–153）

Schegloff, E. 1987. Recycled turn beginnings: A precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization. In Button, Graham, & Lee, John R. (eds). *Talk and social organization*. Cleavedon/ Philadelphia: Multilingual Matters. 70–85

Schegloff, E. 1996. Turn Organization: one intersection of grammar and interaction. *Interaction and Grammar*, ed. E. Ochs, S. Tompson, and E. Schegloff. Cambridge: Cambridge University Press, 52–133

Schegloff, Emanuel. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis 1*, Cambridge: Cambridge University Press

Schegloff, E. 2009. 'A Practice for (Re-) Exiting a Sequence: And/But/So+Uh(m)+Silence', in B. Fraser and K. Turner (eds) *Language in Life, and a Life in Language: Jacob Mey—A Festschrift*, Bingley: Emerald Group Publishing Limited, 365–74.

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. 1977=1990. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, In G. Psathas (ed.), *Interaction Competence*, Washington, D.C.: University Press of America. 31–61.（西阪仰［訳］（2010）「会話における修復の組織」『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』世界思想社　155–246）

Schegloff, E. A. & Lerner, G. H. 2009. Beginning to Respond: Well-Prefaced Responses to Wh-Questions. *Research On Language And Social Interaction*, 42(2), 91–115.

Sidnell, J. 2007. 'Look'-prefaced turns in first and second position: launching, interceding and redirecting action. *Discourse studies* 9(3), 387–408.

〈キーワード〉発話冒頭、冒頭要素、予測、投射

Predictablity in Utterance-Beginnings

Yokuto ITO

The purpose of this paper is to show what is predictable from utterance-beginnings in Japanese conversation. To this end, this study analyzes telephone conversations in Japanese using a Conversation Analysis approach.

By analyzing utterance-beginning elements, this research identifies the following areas predictable from utterance-beginning elements:

(1) continuation of a utterance in progress
(2) action
(3) turn-shape
(4) words
(5) sequential environment
(6) next speaker

This study also demonstrates that other-initiated repair is used when these prediction is broken by a speaker.

This research clarifies significance of utterance-beginnings from the viewpoint of predictability.